

## 「～みたいだ」 文法化の過程

杉浦 滋子

キーワード: 日本語、「～みたいだ」、比況、例示、推量

### 要旨

日本語で比況、例示、推量の用法をもつ「～みたいだ」は「～を見たようだ」が文法化した形式である。先行研究はその過程での形式が変化したこと、及び名詞以外の品詞の語に付くようになったことを指摘しているが、用法の広がりとして捉えるべきであること、用法の広がりにおいて意味の再解釈があることを指摘した。

### 1. 「～みたいだ」の現在の用法

「～みたいだ」は現代日本語では助動詞として扱われる。意味は「～(の/な)ようだ」と多くの共通点があるが、ひとつには口語的な表現である点が異なる。

本稿では「～みたいだ」の意味を比況、例示、推量に分類する。それぞれの意味について検討してみよう。まず、比況においては「AがBみたいだ」という形式で「Aが(Bではないが)Bに似ている」という意味が表される。次のようなものが例となる。

- 1(a)あの方は 30 を過ぎてるはずだけど、まるで学生みたいだ。
- (b)この紅茶、香りがワインみたいだ。
- (c)合成繊維だけど手触りはカシミアみたいだ。
- (d)この一郭は京都みたいだ。
- (e)この古い鍋きれいだね。まるで新しいみたいだ。
- (f)どうでもいいことなのにあの言い方だとさも重要みたいだ。
- (g)この鍋、古いのにまるで最近買ったみたいだ。

比況はAとBの二つの間に成り立つ。A、Bが名詞によって表されるものである場合、(1a)のように視覚的に似ている場合もあれば、(1b-c)のように視覚的でない点で似ている場合もある。(1d)のようにBは固有名詞でもありうる。(1e-g)のように形容詞、形容動詞、動詞で表現される事柄についての比況もある。

また、次の例も比況である。

2(a)こんなに御馳走になって、申し訳ないみたい。

(b)確かにあの人が悪いけど、みんなに責められてかわいそうみたいだった。

これは「話し手の気持ち A が B (という気持ち) に似ている (気持だ)」ことを表す用法である。A が明示されないため、比況ではなく後述の推量の用法のように見えるが、推量とは確実な知識がないことが前提となっており、通常自分の気持ちについては推量は必要ではない。同じ述語を用いた推量の例を(3)に挙げる。(2b)と(3b)を比べればわかるように、推量の場合「～みたいだ」は過去形とならない。

3(a)あの人は御馳走になったことが申し訳ないみたい。

(b)母は、みんなに責められた妹が{\*かわいそうみたいだった/かわいそうだったみたい}。

次の例示の用法においても比況と同じく二つの要素が関与するが、例示の場合(4a)のような「B みたいな A」という名詞修飾の形式もしくは(4b-c)のような述語修飾の形式をとる。例示では、A という集合を指示するにあたって、その集合の要素 B と同じ性質をもつものとして指示する。そのため、A は不特定であってもよい。次のようなものが例となる。「採用したい人(A)」を表すために、「鈴木さん(B)」を提示しているのである。

4(a)鈴木さんみたいな人を採用したい。

(b)鈴木さんみたいに優秀な人を採用したい。

(c)鈴木さんみたいに丁寧にやってください。

ここで、比況と例示の区別が問題になる場合を検討しよう。(5)のような場合には、A (採用した人) と B (鈴木さん) の間に比況が成立するとともに、(4)のような例示とも考えられる。

5(a)鈴木さんみたいな人を採用した。

(b)鈴木さんみたいに優秀な人を採用した。

比況と例示では、どちらも A に言及するために B を用いているが、比況では話し手は A, B どちらについても知識があり、それぞれ独立した存在として意識していて、A についてよりの確に伝えるために B を用いるのに対し、例示では A は独立した存在としては意識されていない。すでに意識されている A を描写するのに B を用いるのであれば比況、B と類似の性質をもったものとして A が表現されているのであれば例示である。比況の場合には A を主語として「B みたいだ」「B みたいに～」が述部となりうるが、

例示の場合にはそれはできず、「B みたいな」「B みたいに」は A を名詞修飾する形でのみ現れる<sup>(1)</sup>。そのため、(5a-b)は比況とも例示とも解釈できるが、(6a-b)は比況としか解釈できず、(7a-b)は非文となる。

6(a)採用した人は鈴木さんみたいだ。

(b)採用した人は鈴木さんみたいに優秀だ。

7(a)\*採用したい人は鈴木さんみたいだ。

(b)\*採用したい人は鈴木さんみたいに優秀だ。

以下の例示の例では、「～みたいだ」が名詞以外の品詞に続いている。(もちろん意味の上では形容詞・形容動詞・動詞に「～みたいだ」が付いているのではなく、[ ]内の要素に付いている。)

8(a) [すごく背が高い]みたいな目立つ特徴はありませんか。

(b) [誰よりも勤勉]みたいな自分のセールスポイントを見つけましょう。

(c) [連絡なしで休む]みたいないい加減なことばかりしている。

さらに、(9a)のような例においては「鈴木さんみたいな秀才」の集合に当然「鈴木さん」は入っているので、「B みたいな A」という表現が文脈において「B」を指すとともに、「B が A である」ことを表現している。言い換えると、「秀才である鈴木さん」とほぼ同じことを表現している。(9b)では「B みたいに X な A」という形式で、同じように「優秀である鈴木さん」とほぼ同じことを表現している。(10)ではさらに明白に「B みたいな A」が「B」を表しており、一致の用法と呼ばれる。A が一般的な性質をもつ名詞である場合には B の性質は「良い」か「悪い」かのどちらかとなる<sup>(2)</sup>。(10c)でも「岡本さん」が「上流の家庭」であることが表現されている。

9(a)鈴木さんみたいな秀才がいてくれると心強い。

(b)鈴木さんみたいに優秀な人がいてくれると心強い。

10(a)私みたいな者に目をかけてくださったことを心から感謝しています。

(b)あなたみたいな方が来てくれて本当によかった。

(c)奥さんは、岡本さん見たいな上流の家庭で育ったので、(夏目漱石『明暗』1916)

比況、例示とも二つのものの間の関係であるが、推量の用法においても、現実の事態と推量されている事態があるのだから、意味の観点からは同じように二つのものの間の関係と捉えることができる。(もちろん、統語的に A が主語として現れないという点で

は比況・例示と異なる。) ただし、比況、例示においては二つのものの間の関係について話し手は明確な知識をもっているが、推量においては現実の事態がどんなものか知らないためそのような知識をもっていない。以下が例となる。

- 11(a) どうやらあの人が店長みたいだ。  
 (b) この鍋はまだ新しいみたいだ。  
 (c) 全員同意していることが重要みたいだ。  
 (d) この植物は枯れたみたいだ。

名詞修飾という環境においても推量の用法で用いられる。

- 12(a) レジで文句を言ったら、その店長みたいな人が出て来て謝罪された。  
 (b) まだ新しいみたいな鍋だけが置いてあった。

(12a)では「店長ではないが店長に似ている人」ではないので比況ではなく、「店長と推量される人」という推量の用法である。同様に(12b)では「新しくないが新しいものに似ている鍋」ではなく、「新しいと推量される鍋」であるので、比況ではなく推量の用法とする。

さらに、推量の用法から発展したと見られる用法に、ある命題が成立することがわかっている場合に「～みたいだ」が使われる婉曲の用法がある。以下が例となる。

- 13 [自分の席に間違えて座っている人に]すみません、そこ私の席みたいなんです...

## 2 「～をみたようだ」から「～みたいだ」へ

「～みたいだ」は歴史的に「～を見たようだ」という表現が変化したものとされている。宮地(1968)は、小説の中の使用例の調査から『～をみたやうだ』から『～みたやうだ』に漸移し、『～みたやうだ』のなかに、『～みたいだ』が派生して共存し、その地位が置き換えられて、今日〔1968〕では、『～みたいだ』の全盛期のような観を呈している」(p.9)とする。(14a-c)はそれぞれ名詞と「～をみたようだ」(表記は「～を見たやうだ」)、「～みたやうな」「～みたいな」(表記は「見たいだ」)の例である。(現代語訳は筆者による。以下も同じ)

- 14(a) 大津絵の福祿寿を見たやうに、天へとどきさうな天窓(あたま)アして、牙むき出してにらめ付らア。[大津絵の福祿寿みたいに天に届きさうな頭をして、牙をむき出してにらみつけているよ] (式亭三馬『浮世風呂』1809)  
 (b) これがお前さん一人の事なら風見の鳥みたように高くばっかり止まって[風見の

鳥みたいにお高く止まって]、食うや食わずにいようとしまいとそりゃアもうどう  
なりと御勝手次第サ、(二葉亭四迷『浮雲』1887)

(c) 相変らず偏窟ねあなたは。まるで腕白小僧見たいだわ(夏目漱石『彼岸過迄』1912)

宮地は、「～みたようだ」と「～みたいだ」の共存については、同一作家の同一作品に  
両方が現れる場合には、発話する登場人物の年齢や教養の度合い、そして発話の文脈(な  
れなれしく甘える場面であるかどうか)により、「～みたいだ」の方がよりくだけた形  
式とする。そして、作家によっては年代が下るごとに「～みたいだ」の形式が増えると  
指摘している。

原口(1974)は「～みたよだ」という中間的な形式があることを指摘し、明治29年代の  
例(15a)のほかに、同じ紅葉山人のこぼを漁村柳筆が記した「紅子戯語」(『我楽多文庫』  
12号、明治21年11月)を挙げている。(15b-c)に見られるように昭和20-30年代にも例  
がある。(15cの『梨の花』は自伝的な小説であり、舞台は20世紀初頭の福井県。)中  
間段階として「～みたよだ」があるのは音韻的な面からは予想されることである。

15(a) 風のわりい雲助見たよに足元を見てゆすりかける。(紅葉山人「風流 京人形」(九)  
『文庫』17号 1889)

(b) 倉[人名]の免状式みたよなお辞儀の頸を見おろして、さみしい感傷を新しくされて  
しまった。(幸田文『鳩』1950)

(c) 「何でおっ母さんはおばばみたよに張小鉢のつくろいをせんのじゃろう……」(中  
野重治『梨の花』1957-58)

また、「を」の有無については、18世紀末に(16a)の「を」のない比況の例、(16b)の「を」  
のある比況の例がある(どちらも宮地1968に拠る)。(16c)(湯澤1957に拠る)は同時  
期の「を」のある例示の例。(16d,e)(原口1974に拠る)は19世紀末の「～みていだ」  
という形式の「を」のある例とない例である。20世紀に入ると「を」の付く形式は少  
なくなるが、(16f,g)の例もある。

16(a) 忠五「どのような客じゃ。」次郎「なんだか雨落のきしゃご見たやうに、しゃれ  
のめすよ。」<sup>(3)</sup>(夢中散人寝言先生『辰巳之園』1779)

(b) 海福寺の木魚をみたやうに、ふとんの上にひとり寝さ。(万象亭『二日酔 卮帚(ふ  
つかよいおおいさかずき)』1784)

(c) さる所に佐八[人名]をみた様ナどふしても色の出来ないといふ男があつた所が…  
(月亭可笑『角鶏卵』1784)

(d) 上等の洋犬(かめ)を見ていに始終牛や何かを食して…(三遊亭円遊口演・佃与  
次郎速記「地獄廻り」『花がたみ』10 1890)

- (e) 人を食度い食度いつて落語家 (はなしか) 見ていナ奴が来たナ。三遊亭円遊口演・佃与次郎速記「地獄廻り」『花がたみ』10 1890)
- (f) お宮のふてぶてしい駄々ッ児を見たような物のいい振りや態度に、私は腹の中でむっとなった。(近松秋江『うつり香』1910)
- (g) 何というか、肩も腰も石をみたようになり、そして一ぱいの酒が飲みたい。(中野重治『五勺の酒』1946)

このように、「～をみたようだ」◇「～みたようだ」◇「～みたよだ」◇「～みたいだ」という形態面での短縮の過程をたどることができる。原口(1974)は「～みたいだ」という形式の発生を明治10年前後と推定しているが、(16d-e)からすると、もっと早いとも考えられる。変化の他の側面として先行研究が注目するのは、どのような品詞の語に付くかである。宮地(1968)は「体言をうけるものが多いが、[中略]活用語の連体形をうけるものも生まれ、また[中略]形容動詞の語幹から連なる形まで見られるようになった」(p.1)と述べている。最初名詞にのみ付いたが、後に他の品詞に続くようになるということは、「～をみたようだ」からの文法化であれば、当然予想される過程である。そして、宮地は動詞、形容詞、形容動詞語幹に付く以下の例を挙げている。

- 17(a) 私は恥づかしさで、頬が焼けるみたいに熱くなった。(太宰治『斜陽』1947)
- (b) お母さんたら、とても気が回ってこすいみたい。お父さんは少しぼんやりしてるの… (石坂洋次郎『若い人』1933-1937、高校生が自分の父親と母親について同級生に言う場面)
- (c) 間崎は恐れ入って、おごそかみたいなその巻煙草を二服三服吸い続けた。(煙草を所望した主人公が珍しい外国製の煙草を差し出されて吸う場面、石坂洋次郎『若い人』1933-1937)

このように、先行研究では形態面での縮約が指摘され、付く語の品詞が名詞から他の品詞へ広がって行くことによって現代日本共通語の状況が作られるという見解が示されている。しかし、共通語における「～みたいだ」文法化の過程を正確に捉えるためには、次の二つの要因をも併せて考える必要がある。

- (I) 「～みたいだ」の広がりを考える上で、「名詞だけから他品詞へ」という側面だけで考えてよいか
  - (II) 「～みたいだ」の現在の共通語での用法に至る過程を検証するにあたって、現在の感覚で不自然な用例をどうとらえるか
- (I)については後述するが、(II)について、(17a-c)のような例をそのまま現在の共通語の状況への過程の証拠としてよいだろうか。程度の差はあれ、いずれも(16a-b)も現在の共通語の感覚とは異なっている。こういった、現代共通語の感覚では不自然な用例は、作

者の地域方言あるいは個人方言の類なのだろうか、もしくは「～みたいだ」の文法化が一定の方向に進んで来たのではなく、現在の状態に至るまでに現在とは異なる使用方法がある時期あるいは集団や個人に存在したのだろうか。この問題についても後述する。

ところで、「～（を）みたようだ」と類似した形式と意味をもつ「～（を）みるようだ」がある。この形式は『浮世風呂』にも例が見られるが、上方語でより広く使われた。次節では上方での「～をみるような」の文法化について触れる。

### 3 「～（を）みるようだ」と「～（を）みたようだ」

鈴木(2002)は近松門左衛門の浄瑠璃台本と上方板洒落本を資料として<sup>(3)</sup>、上方語「～（を）みるやうだ」について次の三つの用法を区別する。以下、鈴木の例と共に挙げる。

#### 18 <い> 眼前にない状況を空想ないし予測する表現

おおそちのようなやせた男がそなたにせがまれてやがてごけになりやるをみるやうな [おお、あんたののようなやせた男があんたにせがまれて、しまいには後家になるのが見えるよう] (『小島彦十郎好色伝授』1693)

<ろ> その時浮かんできた心象を表す表現

しにいるやうのなげきのかほ 今みるやうできくやうで。 [死に入るような嘆きの顔が、今も見えるよう、聞こえるよう] (近松門左衛門『心中二枚絵草紙』1706)

<は> 比況

そちの男ハ大ぶつのはしらをみるやうな [あんたの男は大仏の柱みたい] (『小島彦十郎好色伝授』1693)

…つしまの客から参った朝鮮人参。をはり大根見る様なをきざみもせず丸ぐち。 [対馬の客からいただいた朝鮮人参。尾張大根みたいなのを刻みもせず丸かじり] (近松門左衛門『傾城反魂香』1708)

(18)から、上方語「～みるような」には現代共通語の「～みたいだ」とは異なる用法があることがわかる。<い>、<ろ>がそうだが、鈴木が<い>とするのは、現代語では「将来～という事態になるのが見えるようだ、目に浮かぶ」と言うような場合である。<ろ>は、「ある視覚的な印象が今日の前にあるように感じられる」ことを意味し、現代語では「～が目に浮かぶ」と言い換えられる。それに対し、<は>は現代共通語の「～みたいだ」同様、実際に何かを知覚し、それが何か別のものと類似しているとする表現である。鈴木は、比況について「心象の下位類と考えるが、区別の基準を刺激因が外在しているかどうか置く。…心象か比況かと考えるのではなく、心象かそれとも心象に基づいた比況かという考え方で判断するわけである。(p.269)」と述べ、<は>を<ろ>の下位類とするが、この考えには二つの理由で異議を唱えたい。まず、今述べたように、現代共通語で<い><ろ>は「～が目に浮かぶ」と言い換えられるが、<は>は言い換えられないの

で、前二者には<は>にない共通点があると考えられる。次に、<ろ>を心象、<は>の比況を「心象に基づいた比況」とするが、<は>においては、話し手にある心象が浮かび、それと眼前の事態（あるいは事態の要素）の間に共通点を見つけるのではなく、眼前の事態（あるいは事態の要素）という知覚刺激を受け、それを適切に表現するために記憶の中のある要素に類似しているとしているのだから、<ろ>と<は>は決定的に異なっており、後者を前者の下位類と見ることは不適切である。

鈴木は上方語「～みるようだ」の文法化の過程として a)の解釈から b)の解釈の変化があったとし、共通語「～をみたようだ」についても同様に考えられるとする(p.5)。

a) (刺激因) ... 「[私ハ] ～ (を) みるやうな。」(心象、話者の内面に起きたことの叙述)

b) 「**刺激因** (は) **喩え** (を) みるやうな。」(比況、刺激因それ自体に対する叙述)

この図は、<い><ろ>においては、そもそも刺激因が存在しないのだからあてはまらないが、比況（鈴木の<は>）の用法の発生のモデルとしては妥当であり、「～ (を) みたようだ」についても同じように考えることができる。

文法化の過程においては、文法化以前の構造とも以後の構造とも解釈できる段階があるとされている(Hopper and Traugott 2003)が、「～みるようだ」については次のようなものがそれにあたる（ただし、18<は>の例として挙げた例は19に先行する）。

19 なんぼうつくしうても唐の女房の衣装つきあたま付。弁財天を見る様で勿体なふて気がはつて... (『国姓爺合戦』1715 鈴木2002に拠る)

従来の構造：(その女を見る気持は) [ ϕ 弁財天を 見る] ようで勿体なくて

新しい構造：(その女は) [ 弁財天 [を見るよう] ] 勿体なくて

また、「～ (を) みたようだ」についても、上方語で文法化以前の構造とも以後の構造とも解釈できる用例が見られる。

20 にしめ大豆山椒の皮などはさむハ、色町を見たやうにおもはれてしほらしければ、[ (上等ではない遊興の場を上等のものとは比べる場面。女性は客の前では肴に手をつけないのがたしなみ。貝や玉子を避けて) 煮豆や山椒の皮をつまむに留める様子が色街に似て上品で] (『好色一代女』1686)

従来の構造：[にしめ大豆山椒の皮などはさむ] (様子) は

[ ϕ 色町を見た] やうに思われて

新しい構造：[にしめ大豆山椒の皮などはさむ] (様子) は

[ [色町] [を見たやうに] ] 思われて



鈴木の研究は上方語についてだが、「～（を）みるようだ」は次のように、江戸語にも見られる。『浮世風呂』には4例見られ、「～みるようだ」<い>の例が(21a-b)の2例、「～（を）みるようだ」<は>すなわち比況の例が(22a-b)の2例である。

- 21(a)おほかた悪口を腹さんざ云つた跡が、駄味噌の拳だらう。ホンニ見る様だよ[大方悪口をさんざん言った後はつまらない自慢をするんだらう。ホントに見えるようだよ] (式亭三馬『浮世風呂』1809)
- (b)いけツ吝(ちは)くして溜(ため)た金は、さゝほうさにされるのよ。ホンニホンニ見る様(やう)だア[けちけちして溜めた金はむちゃくちゃにされるんだよ。ホントに目に浮かぶよ] (式亭三馬『浮世風呂』1809)
- 22(a)びび賓頭盧の手間取を見るやうに、しや、しや、しやちこぼつて、ナナゼ、、高い所に居るウ[なぜ賓頭盧の手間取みたいにしゃっちょこぼつて高い所にいるんだ] (式亭三馬『浮世風呂』1809)
- (b)風見の鳥を見るやうに高くとまつてすまアして居(ゐ)るも小癩に障(さわら)ア。[風見の鳥みたいに高くとまつてすましているところも癩に障る] (式亭三馬『浮世風呂』1809)

#### 4 現代共通語の「～みたいだ」の文法化の過程

##### 4.1 初期

現代共通語における「～みたいだ」がどのような文法化の過程を経て出現するかを見るために、江戸出身の式亭三馬『浮世風呂』(1809-1813)と鶴屋南北『東海道四谷怪談』(1823)を調べた。『浮世風呂』で「～（を）みたようだ」の明白に文法化された例は次の2例のみである。

- 23(a)女房で候と打居て置いて、売薬屋の銅人形見たやうに、看板にされたばかりもつまらねへぢゃねへか。[女房でございとうっちゃって置かれて、売薬屋の銅人形みたいに看板にされているばかりもつまらないじゃないか] (式亭三馬『浮世風呂』1809)
- (b)大津絵の福祿寿を見たやうに、天へとどきさうな天窓(あたま)アして、牙むき出してにらめ付らア。[大津絵の福祿寿みたいに天に届きそうな頭をして、牙をむき出してにらみつけているよ] (同)

『東海道四谷怪談』には次の例のみであるが、これは文法化以前の例としての解釈も可能である<sup>(5)(6)</sup>。

- 24 いっそ会はぬその前に死んだと聞いたら諦められう。夢見たような女夫の縁。[夢の

ようにはかない夫婦の縁／夢を見たようにはかない夫婦の縁。] (鶴屋南北『東海道四谷怪談』1823)

(16a,b)も先行研究に江戸出身の作者の作品にあるとされる例である。

それでは、「～をみたようだ」の文法化は何を契機として始まったのであろうか。「～をみたようだ」の比況の表現としての文法化が始まった時期には、「～(の)様(やう)だ」という類似を表す表現はすでに存在しており、「～(の)ごとし」と言う表現も、次のように比況を表すのに用いられている<sup>(7)</sup>。筆者の『浮世風呂』の調査では上述したように「～(を)みたようだ」が2例、「～(を)みるようだ」が2例であったのに対し、比況を表す「～(の)ようだ」は67例あった。また、「～(の)ごとし」は地の文と年配の話者の発話の中に14例あった。

25(a)角力取の灸の蓋のやうに紙を張たが、あの戸棚は何だ[相撲取りの灸の蓋のように紙を張ってあるが、あの戸棚は何だ] (式亭三馬『浮世風呂』1809)

(b)儉約と吝嗇は水仙と葱のごとく、形は似て非なるもので、(式亭三馬『浮世風呂』1809)

この数字からもわかるように、「～(の)やうだ」が最も一般的な比況の表現である。そのような表現があるのに「～(を)みたやうだ」が用いられる理由は、類似を見ての驚き・感動をより生き生きした方法で表現したいためである。そのため、「～(を)みたやうだ」の初期の比況の例では、Bとして現れる名詞は「雨後のきしゃご」「海福寺の木魚」「売薬屋の銅人形」「天津絵の福祿寿」といった、滑稽を誘うような普通名詞である。最初は「～(を)見たやうだ」が文末にのみ現れて使われていたのが、後に名詞修飾や述語修飾として現れるようになったと考えるのが自然だが、このような推移の確認はできていない。

#### 4.2 「～(を)みたやうだ／みたいだ」の広がり

「～(を)みたやうだ／みたいだ」が名詞以外の品詞に付くようになる過程についての考察が先行研究にあるが、「～(を)みたやうだ／みたいだ」の広がりをどのような品詞に付くか、という観点で考える以外に、用法の拡大という観点から見ることも可能である。「～(を)みたやうだ／みたいだ」が類似を見ての驚きの表現として発生したならば、当然比況の用法が最初の用法であり、例示、推量はそこから派生した用法であるので、ある用法から別の用法への広がりがある。しかし、実際に名詞から他の品詞へと広がったことも事実なので、それらの広がりがどのように進行して行ったかできる範囲で検証する。

調査の範囲で最も古い比況の例を探してみると、1686年の例(20)とも考えられるが、

これは文法化以前の構造とも解釈できるので除外する。明白に文法化した例として最も古いのは(16a)(1779)であり、例示の最も古い例は湯澤の挙げる(16c)であるので、この点からは比況の用法のみの段階があったことは確認できない。

19世紀末になると、(26)のような例が現れる。

26(a)孔子さんに対してはお気の毒見たやうに思はれます。(天愚道人『滑稽天狗演説』1887)

(b)厭じゃないかえ、お前達と友達を見たやうで[お前達と友達みたいで]はづかしい、あれ、いけませんよ。(泉鏡花『高野聖』1900)

(26a)は「思う」の必須要素が「～みたように」が付いた形で現れるが、この例からは、話し手の気持の比況の用法で「～みたようだ」が文末にあった段階が想像される。(27b)は興味深い例で、「そんな風にお前達が振る舞うと、私がお前達と友達のように恥ずかしい」という意味なので、表面的には「～(を)みたようだ」が「友達」という名詞に付いているようだが、「(話し手が)お前達と友達」という節に付いている。つまり、名詞に付いている例であっても、形式の上で名詞に付いていることと、意味の上で名詞に付いていることは同じではないことがわかる。(11a)のような推量の場合には形式の上では名詞に付いていても、意味の上では文に付いていることが意識されやすいが、比況においても同じ区別が存在することになる。ただし、天愚道人、泉鏡花とも江戸・東京以外の出身であり、江戸・東京出身者とは区別すべきかもしれない。

江戸・東京出身であり、作品に口語的な要素のある二葉亭四迷の例としては、(14b)のような比況の例のほかに、一致の例(27)がある。

27(a) それをネー何処かの人みたやうに、親を馬鹿にしてサ。(二葉亭四迷『浮雲』1887)

(b) 君みたやうなものでも、人間と思ふからして……(二葉亭四迷『浮雲』1887)

(c) お勢[人名]みたやうなこんな親不孝な者(もん)でもそう何時までもお懐中(ぼっぼ)で遊(あす)ばせても置(おけ)ないと思うと(二葉亭四迷『浮雲』1887)

さらにもう少し時代が下ると、新たな用法と考えられるものが出現する。同じように江戸・東京出身の夏目漱石については田島(2004)の詳しい研究があり、それによると、漱石の全作品(『吾輩は猫である』1905から『明暗』1916の16作品)中には「～みたようだ」118例、「～みたいだ」33例がある。「～みたようだ」と「～みたいだ」のどちらの形式が用いられるかを年代順に見ると、『吾輩は猫である』から『門』には「～みたようだ」のみが見られ、『彼岸過ぎまで』(1912)と最後の『明暗』においては「～みたようだ」と「～みたいだ」の両方が見られる(『こゝろ』と『道草』に用いられているのは「～みたようだ」のみだが、それぞれ3例、2例と少ない)。最後の『明暗』が

唯一「～みたいだ」の例が「～みたようだ」の例の数を上回る作品となっている。田島(2004)では用法に分けた分析はされていないので、初期の『吾輩は猫である』と『坊っちゃん』、後期の『明暗』を用法別に調査したところ、次のような状況であった。

	「～みたようだ」		「～みたいだ」	
	『吾輩は猫である』 (1905)	18	比況 14 例示 5 一致 1	0
『坊っちゃん』 (1905)	9	比況 6 例示 1 一致 2	0	
『明暗』(1916)	10	比況 6 例示 2 推量 2	18	比況 7 例示 6 一致 5

初期の『坊っちゃん』の次の例が興味深い。(漱石の作品において「～みたようだ／みたいだ」が付く品詞はこれを除けば皆名詞である。)

28 鈴ちゃん逢いたい人に逢ったと思ったら、すぐお帰りで、お気の毒さまみたようでげすと相変らず嘸し家みたような言葉使いをする。(夏目漱石『坊っちゃん』1905)

「お気の毒さま」とは、相手に同情して投げかける一語文であろう。その意味で名詞ではない(「お気の毒」と考えたとしても名詞ではない)。これは、(2)で例示した話し手の気持ちについて述べる比況の用法である。

『明暗』に現れる次の2例は推量と考えられる。比況の「B みたいな A」では、「AはBではない」(と話し手が知っている)ことを条件としているが、(29a)では生地がホームパンである可能性、(29b)では若者が牛乳配達である可能性もあるため、比況ではなく推量と判断した。

29(a)ホームパンみたようなざらざらした地合の背広を着ていた。

(b)向うにいる牛乳配達見たような若ものに声をかけた。

推量と解釈できる用例は漱石においてこのように名詞修飾という統語的環境で見られるわけだが、林芙美子『放浪記』においても同様である。第一・二部(1928-1930)には「～みたいだ」の例が27例あるが、そのうち2例が推量であり、以下のように名詞修

飾で現れる。

- 30(a)門のそばにはこわれた門番の小屋みたいなものがあって、綺麗（きれい）な砂利が遠い玄関までつづいている。（林芙美子(1928-30)『放浪記 第一部』）
- (b)万里の城のように、うねうねとコンクリートの壁をめぐるしたドックの建物を山の上から見降ろしていると、旗を押したてて通用門みたいなところに黒蟻（くろあり）のような職工の群が唸っていた。（林芙美子(1928-30)『放浪記 第二部』）

林芙美子『放浪記』第一・二部(1928-1930)にはまた、(31)の例が見られる。「～みたいに」が名詞「二重写し」に付いているようだが、意味の上では節に相当する「背景と二重写し」に付いている点で、従来にない統語的環境に現れる例である。(31)を除いては第一・二部(1928-1930)には名詞についた例しかない。

- 31 背景と二重写しみたいに、そぐわないモダンさで群れている。（林芙美子『放浪記』第二部 1928-30）

ほぼ同時期であっても、文あるいは文相当の要素（「そう」）に「～みたいだ」が付く比況・推量の例を用いる作家もいる。(32a)は述部が名詞である文に「～みたいだ」が付いた比況の例、(32b-c)は推量の例である。

- 32(a)まるで、それでは仕事のできないの、阪部さんの責任みたいね……」（宮本百合子『伸子』1924-1926）
- (b)細君は何だか、生れつき以外に、細君的属性とでも云うものが要求されるみたいね。（宮本百合子『伸子』1924-1926）
- (c)「それに、私について話すと云ったって——誰しも一寸困るじゃあないの、何をどうするって云う、具体的な問題が今ある訳じゃないんだし……」<中略>  
「——……それはまあ、そうみたいなんだがね——（宮本百合子『伸子』1924-1926）

もう少し時代が下ると、他の作家の作品にも(33)のように動詞句あるいは文に付く例が多く現れる。(33a-f)は比況、(33g)は推量の例である。

- 33(a)公園のお猿さんに食べ物をやつて見物してゐるみたいぢやありませんか(石坂洋二郎『若い人』1933-37)
- (b)夏冬足袋を穿いてるみたいで面白くないと思ひますわ（石坂洋二郎『若い人』1933-37)
- (c)私自身もお伽話をしてるみたいで…（石坂洋二郎『若い人』1933-37)

- (d)先刻の見て騙されたみたいでつまらなかつたの (石坂洋二郎『若い人』1933-37)
- (e)泥の中に嵌つたみたいで身動きも出来ない (石坂洋二郎『若い人』1933-37)
- (f)まるで幽霊と話しているみたいで気味が悪いよ。(横光利一(1935)『上海』)
- (g)先生は、『痛い／＼、もう澤山……』つて私の耳をギュツとつまんで仰言つたの、泣いてるみたいだつたわ…… (石坂洋二郎(1933-37)『若い人』)

林芙美子『放浪記』第一・二部(1928-1930)と第三部(1946)の執筆の間に間隔がある<sup>(8)</sup>ことが前者と後者での「～みたいだ」の使用と関係しているように思われるので、検討してみよう。「～みたようだ」は第一・二部に1例現れるのみ、「～みたいだ」は第一・二部に27例、第三部に25例あった。第一・二部では「～みたいだ」は(31)を除いて名詞に付くのみであり、(31)でも述部は名詞だったが、第三部では述部が名詞ではない文あるいは動詞句に付く例として以下の3例がある。

- 34(a)かいろを抱いているみたいだ。(林芙美子『放浪記 第三部』1946)
- (b)兎がひとねむりするみたいに、死にたいと云うことをころやすく云ってみる。(林芙美子『放浪記 第三部』1946)
- (c)広い沙漠に迷いこんだみたいに頼りどころがないのだ。(林芙美子『放浪記 第三部』1946)

同じ1946年の新美南吉の短編『嘘』、翌1947年の太宰治『斜陽』にも、(35)の比況の例が見られるので、この時点では文や動詞句に付くことが広がりつつあったのであろう。ただし、『斜陽』の例は比況と例示のみで、推量の用法では使われていない。太宰という個人のこの時期の言語体系の中で、比況の用法の「～みたいだ」は文に付くことがありえたが、推量の用法の「～みたいだ」は存在していないことになる。新美についても、今回対象とした作品の中に推量の「～みたいだ」は現れない。

- 35(a)久助君の小さな口の中に、すずしい秋の朝が、ごっそりひとつはいいりこんだみたいだ。(新美南吉『嘘』1946)
- (b)陽(ひ)の光が、まるで東京と違うじゃないの。光線が絹ごしされているみたい(太宰治『斜陽』1947)
- (c)子供が二人で暮しているみたいなんだから、(太宰治『斜陽』1947)

「～みたようだ」の使用は調査した中では『明暗』以降少なくなる。しかし、作家によっては1950年代にも以下のような用例が見つかる。

- 36(a)おまえは断つてしまえば赤の他人みたように思っているらしいが、(幸田文『結婚

雑談』1955)

- (b)まるでばかみたようなものだ。(幸田文『長い問いのあと』1956)
- (c)まるで従兄みたようにしていたので(幸田文『笛』1957)
- (d)御馳走の御膳が出てくる時みたようだということだろう(中野重治(1957-58)『梨の花』)

(36)のような例は散見されるが、宮地(1968)が指摘するように『若い人』に見られる唯一の「～みたようだ」の例が年配の教師の発話にある次のものであることから、1930年代においては「～みたようだ」が保守的な形式で「～みたいだ」が新しい形式であると一般的に認識されていたものと思われる。

37 ふるーい、夢みたようなお話でしょう。(石坂洋二郎(1933-37)『若い人』)

そして、同時期に複数の作家が文や動詞句に「～みたいだ」を付けるようになっていた。湯澤幸吉郎(1953)は、動詞・形容詞・助動詞に付く例が「談話に現れるだけであったが、近頃は作物にも珍しくなくなった」、「時と共にますます広く行われるようであって、一般の用語となる日もあまり遠くはなからうと考えられる」と述べている。それでいて1887年生まれの湯澤は「標準的な言い方と認めるには早過ぎると思う」(p.232)としているが、これは保守的な見方であろう。

推量の用法が文についた例をもうひとつ挙げておく。

38 煙草の増税で二千万円ばかり収入があったそうだが、七割はバットだつてね。バットは一個について一銭だから、率は一等すけない<sup>(9)</sup>みたいなんだが、何しろ皆が喫うもんだから。(宮本百合子『内あけ話』1937)

#### 4.3 他の形式との関係

「～みたいだ」の広がりについて述べたが、ある形式の使用が広がれば、当然他の形式に影響が出て来る。「～(を)みたようだ/みたいだ」が広がることによって、どのような形式の使用が減少あるいは変化したのか、という他の形式との関係を考えてみる。まず、かつて使用されていた比況・例示・推量を表す形式の代わりに用いられると考えられる。例えば現在ではそれほど使われない「～ごとし」「～と見える」が現在の「～みたいだ」が使用できる文脈で使われている。

39 比況

- (a)漆のごとき斑入りの皮膚を有している。(夏目漱石『吾輩は猫である』1905)
- (b)性の悪い牡蠣のごとく書斎に吸い付いて(夏目漱石『吾輩は猫である』1905)

40 例示

江戸は他国のぼんをどりのごとく、対のゆかた音頭とりなどありて、をどる事たえてなし。(式亭三馬『浮世風呂』1809)

41 推量

あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛がっていると見えますね(夏目漱石『吾輩は猫である』1905)

しかし、「～みたいだ」だけがこれらの形式に代わって使われるわけではなく、他の形式も使われ、特に「～みたいだ」と用法が重なっている「～ようだ」は今回調査した期間を通じて多く使われている。そして、「～みたいだ」の広がりを考える上では、「～ようだ」との用法の異同を考察する必要もある。

用例の中には現在の感覚では不自然で、現在であったら「～(な)感じがする」の方が自然に聞えるものがあつた。それは、比況の特別な場合とした話し手の気持を表す場合である。「～ようだ」についても同様に現在では不自然なものがみられる。『吾輩は猫である』から例を挙げる。

42(a) (ある出し物の内容を聞いた後) 東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あんまり、あつけないようだ。もう少し人情を加味した事件が欲しいようだ」と真面目に答える。  
(夏目漱石『吾輩は猫である』1905)

(b) とん子[人名]は驚ろく景色(けしき)もなく、こぼれた飯を鄭寧(ていねい)に拾い始めた。拾って何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきかないようだ。(夏目漱石『吾輩は猫である』1905)

「～みたいだ」については(17b,c)に加え、次のようなものも見られる。

43(a) 橋本先生の叔父さん、頓狂みたいな方ね(石坂洋次郎『若い人』1933-1937)

(b) 古風で貞淑みたいな女になつてみたかつたんだと(石坂洋次郎『若い人』1933-1937)

(c) 伸子は弟の肩越しに首をのばした。それは二尺に三尺ぐらいの苗箱であつた。細かい細かい黒土を見事にふるいならしたところに、四分ほどに延びた芽生えが、弱々しく、ひよろり、ひよろりと並んでいる。

「何の芽生え?……少し貧弱みたいね、いいの、それで」(宮本百合子『伸子』1924-26)

これらの例と現在の状況の違いを見ると、まず「～みたいだ」についても「～ようだ」についても、名詞修飾の環境で話し手の気持の比況を表すことはできない。そのため、(43a)を現代の感覚で判断すると、(44)のようになる。



- 44(a) \*橋本先生の叔父さん、頓狂なような方ね  
(b) \*橋本先生の叔父さん、頓狂みたいな方ね  
(c) 橋本先生の叔父さん、頓狂な {感じの / 感じのする} 方ね

述部という環境においては、「～ようだ」はやはり現代的ではない。それに対し、「～みたいだ」は口語において（多く「～みたい」の形で）その時抱いた気持の比況として使われる。ただし、「～みたい」も気持を表さない形容詞・形容動詞には不自然である。むしろ、(46)の表現が使われるであろう。

- 45(a) あまりにもあっけない {?ようだ / ok みたい}。  
(b) もう少し人情を加味した事件が欲しい {?ようだ / ?みたい}。  
(c) 少しきたくない {?ようだ / ?みたい}。

- 46(a) あまりにもあっけない {ような気がする / 感じがする / 感じ}。  
(b) もう少し人情を加味した事件が欲しい {ような気がする / 感じがする / 感じ}。  
(c) ちょっと汚ない {ような気がする / 感じがする / 感じ}。

話し手の気持の比況という意味領域では「～みたいだ」「～ようだ」の両方が使われていたが、「～ようだ」は用いられなくなりつつあり、「～みたいだ」は話し手の気持を表すような形容詞・形容動詞が述部である場合に限ってまだ使われていることになる。(2)の例において「～ようだ」に置き換えた文も不自然である。

- 2'(a) ?こんなに御馳走になって、申し訳ないよう。  
(b) ?確かにあの人が悪いけど、みんなに責められてかわいそうようだった。

また(17a)も現在の感覚では不自然であるが、これは現在の比況の用法で「～みたいだ」が動詞に付く場合、状態の比況に限られるからと思われる。

さらに、(1)の比況の用例において「～ようだ」に置き換えられるかどうかを見ると、形容詞、動詞、形容動詞で終わる節に付く場合には古さを感じさせる表現となる。つまり、活用語に付く比況の形式は「～みたいだ」へと変化しつつあると言えよう。

- 1'(a) あ的那个人は 30 を過ぎてるはずだけど、まるで学生のようにだ。  
(b) この紅茶、香りがワインのようにだ。  
(c) 合成繊維だけど手触りはカシミアのようにだ。  
(d) この一郭は京都のようにだ。  
(e) ?この古い鍋きれいだね。まるで新しいようにだ。

- (f)? どうでもいいことなのにあの言い方だとさも {重要な/重要である} ようだ。  
 (g)? この鍋、古いのにまるで最近買ったようだ。

例示の用法では、現在「～ようだ」「～みたいだ」の間には文体の違い以外の違いはない。名詞修飾においては「～ようだ」に例示の用法があるものの、述語として用いる場合、山口(2002)に指摘されているように、述部修飾として用いる場合には不自然であり、「～みたいだ」と同じである。

- 4'(a) 鈴木さんのような人を採用したい。  
 (b) 鈴木さんのように優秀な人を採用したい。  
 7'(a)\* 採用した人は鈴木さんのようだ。  
 (b)\* 採用した人は鈴木さんのように優秀だ。

推量の用法で「～みたいだ」と「～ようだ」を比べると、述部では文体以外の違いはない。ただし、普通体では少々古さを感じさせる。名詞修飾の場合はどうだろうか。(11)の「～みたいだ」を「(の)～ようだ」に置き換えた(11')は、もちろん文法的な文だが、推量としての解釈は難しい。

- 10'(a) どうやらあの人が店長 {のようだ/ようです}。  
 (b) この鍋はまだ新しい {ようだ/ようです}。  
 (c) 全員同意していることが重要 {なようだ/であるようだ/なようです/であるようです}。  
 (d) この植物は枯れた {ようだ/ようです}。  
 11'(a) レジで文句を言ったら、そこの店長のような人が出て来て謝罪された。  
 (b) まだ新しいような鍋だけが置いてあった

このように、「～みたいだ」は推量の用法を獲得してから、「～ようだ」とほぼ同じ意味領域を表現していたが、話し手の気持の比況においてはどちらも衰退したが、「～みたいだ」が一部その機能を保持しており、比況の用法で活用語に付く場合には「～ようだ」に置き代わりつつある。また、「～ようだ」は文末では推量の解釈があるものの、名詞修飾では推量の解釈は難しくなっている。

## 5. 結び

今回対象とした資料からわかる「～をみたようだ/みたいだ」の変化を述べると、18世紀終盤には「～(を)みたようだ」という形式で比況・例示用法で意味の上では明白に文法化しており、名詞あるいは名詞句に付いていた。ただし、話し手の気持を表す要

素には名詞でなくとも付いている例がある。19世紀終盤には話し手の気持の比況の用法で名詞以外の要素に付く例も現れ、「～みたよだ」「～みたいだ」という形式も出現して「～をみたよだ」と比況・例示の用法で共存していた。また、名詞ではなく名詞を述部とする節に付く例もこの時代に見られた。20世紀初期には名詞修飾で推量と思われる例が出現する。1930年頃には文・節に付く比況・推量の例が現れる。

先行研究では「～みたいだ」の広がり、名詞から他品詞に付くようになるという広がりを見ていたが、その見方では、(26a)の例が早く現れることが説明できない。また、夏目漱石個人の言語体系の中で(28)が現れていることが説明できない。よって、用法から見るという観点が必要である。ただし、(26b)(31)のように、名詞を主部とする節や句に付く例から他の品詞を主部とする節や句へと広がったと見られるので、「～みたいだ」が意味の上である要素に付くという性質をもつことと、形態的にある品詞に付くという性質をもつことを明確に分けて考える必要がある。そして、推量という新しい用法が(29)(30)のような例から生じたのであれば、そこで次のような意味の再解釈が起こったことになる。

通用門みたいなところ

従来の解釈：通用門ではないがそれに似た場所

新しい解釈：通用門と推量される場所

つまり、統語的な構造の再解釈だけではなく意味の上での再解釈も考える必要がある。

本稿では「～を見たよだ」が「～みたいだ」へと文法化する過程を考察したが、「～よだ」を含む日本語のほかの比況の形式や、他言語における比況の形式の変化の過程がこの「～(を)みたよだ/みたいだ」の辿った過程とどのような共通点と違いを見せるのかを検証して行きたい。

[注]

(1)山口(2002)に指摘のあるように、「～のよだ」の場合も同様で、(ia-b)は比況とも例示とも解釈できるが、(iia-b)は比況としか解釈できない。

i. 鈴木さんのような人を採用した。

ii. 採用した人は鈴木さんのように優秀だ。

なぜ「～よだ」「～みたいだ」が例示の場合に述部とはなれないのかについて、内田(1977)は「用言的な性質をもつとは言えない」「述語としての述定性がない」(p.364)としている。例示の用法で用いた「～よだ」「～みたいだ」の語彙的な性質として説明するわけだが、例示という用法の意味からの説明が必要であろう。

(2) (10)に見るとおり、「～みたいな」はよい性質・悪い性質両方を表すことができ、「～のような」も同じであるが、「～のごとし」の連体形「～ごとき」については、現代日本

語では悪い性質を表す用法のみにて残存しており、(ii)のように主名詞のない準体法も見られる。

- i. 私ごとき若輩者にこのような場を与えていただき、ありがとうございます
  - ii. 私ごときが申し上げるまでもありませんが…
- (3) 「きしゃご (きさご) 」とは雨樋の下にはねよけとして置いた貝の一種で、「雨落のきしゃご」はしゃれている様子を指す慣用句として定着していた。
- (4) 『小島彦十郎好色伝授』(1693)、『心中二枚絵草紙』(1706)、『堀川波鼓』(1707)、『心中重井筒』(1707)、『傾城反魂香』(1708)、『嫗山姥』(1712)、『大経師昔暦』(1715)、『国姓爺合戦』(1715)、『博多小女郎浪枕』(1718)、『心中天の網島』(1720)、『無理里問答』(1775)、『虚辞先生穴賢』(1780)、『浪速花兵衛今今八卦』(1784)、『粹学問』(1799)、『南遊記』(1800)、『籍潜妻』(1807)
- (5) 宮地は『東海道四谷怪談』の例として次のものを挙げているが、宮地がどの版を参照したのか不明であるため確認できていない。
- i. 何だえ、お前、おやまだの惣嫁だのと、日光道中記を見たやうな事をお云ひだね。
- (6) (24)のように、「～(を)みたようだ」が「夢」に付く場合には文法化しているかないか他の名詞より判断が難しい。
- (7) 節に付く形式として「～という」も比況の表現として用いられており、5例ある。
- i. 広島薬罐 (やかん) の口をもいだといふ額だ。
- (8) 『放浪記』第一・二部は雑誌『女人藝術』に1928(昭和3)年～1930(昭和5)年の間に連載され、第三部は1946年から『日本小説』に連載された。参考にした青空文庫のファイルは、改稿された第一・二部を用いている。
- (9) 「すけない」は「少ない」の意の語。

## 参考文献

- 内田賢徳(1977)『『みただ』の転用について』『国語国文』 46-5[論説資料保存会編(1977)学論説資料 14号第3分冊所収]
- 大場美穂子(2002)動詞『ようだ』と『らしい』の違いについて』『独協大学 マテシス・ウニウエルサリス』3-2 [論説資料保存会編(2002) 日本語学論説資料 CD-ROM版 39号第2分冊・増刊所収]
- 鈴木浩「近世上方語のミルヤウナ —ミタイダ成立前史—」(2002)『明治大学文学部紀要 文芸研究』87 [論説資料保存会編(2002) 日本語学論説資料 CD-ROM版 39号第2分冊・増刊所収];
- [https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/dspace/bitstream/10291/7453/1/bungeikenkyu\\_87\\_\(1\).pdf](https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/dspace/bitstream/10291/7453/1/bungeikenkyu_87_(1).pdf)
- 田島優(2004)「漱石作品における語の習熟—「みたようだ」から「みただ」への変遷—」『語彙研究の課題』和泉書院[田島(2009)『漱石と近代日本語』翰林書房に第七章第二節として所収]

- 原口裕(1974)『『みたようだ』から『みたいだ』へ』『静岡女子大学国文研究』7  
宮地幸一(1968)『〈…みたようだ〉から〈…みたいだ〉への漸移相』『学芸国語国文学』  
3  
山口堯二(2002)『『やうなり>やうだ』の通時的变化』『京都語文』8 仏教大学国語国文学  
学会 [論説資料保存会編(2002) 日本語学論説資料 CD-ROM 版 39号第2分冊・  
増刊所収]  
湯澤幸吉郎(1953)『口語法精鋭』明治書院  
——(1957)『増訂 江戸言葉の研究』明治書院  
吉田金彦(1971[2010])『現代語助動詞の史的研究』[『吉田金彦著作選 7 現代語の助動  
詞』明治書院]  
Hopper, Paul J. and Elizabeth C. Traugott (2003) *Grammaticalization*. Cambridge University  
Press.

#### 資料

- 石坂洋二郎(1947)『若い人 上・下』新潮文庫  
井原西鶴『好色一代女』『新潮日本古典集成 (第三回)』(1976)  
泉鏡花『高野聖』集英社文庫(1992)  
幸田文『幸田文』『ちくま日本文学全集』筑摩書房(1993)  
式亭三馬『浮世風呂』岩波書店『新 日本古典文学大系』86(1989)  
鶴屋南北『東海道四谷怪談』新潮社『新潮日本古典集成』第45回(1981)  
天愚道人(1887)『拍手喝采 滑稽天狗演説』翰香堂  
中野重治『梨の花』岩波文庫(1985)  
——『中野重治』『ちくま日本文学全集』筑摩書房(1992)  
林芙美子『放浪記』新潮文庫(1979)  
青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/index.html>  
泉鏡花『女客』／三遊亭円朝『怪談牡丹灯籠』『業平文治漂流奇談』／島崎藤村『夜明  
け前 (上)』／太宰治『斜陽』／田村俊子『木乃伊の口紅』／田山花袋『田舎教師』／  
近松秋江『うつり香』／夏目漱石『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『彼岸過ぎまで』『明  
暗』／新美南吉『明日』『疔』『牛をつないだ椿の木』『嘘』『うた時計』『おじいさんの  
ランプ』『鍛冶屋の子』『川』『木の祭り』『仔牛』『ごん狐』『和太郎さんと牛』／樋口一  
葉『たけくらべ』『にごりえ』『わかれ道』／宮本百合子『打あけ話』『鏡餅』『昨今の話  
題を』『伸子』／森本薫『華々しき一族』／夢野久作『奥様探偵術』『押絵の奇蹟』『巡  
査辞職』『章魚の足』／横光利一『汚い家』『厨房日記』『機械』『春は馬車に乗って』『旅  
愁』『上海』／若松賤子『黄金機会』『忘れ形見』

